

2023年度
新設

難聴や聴覚障害に対する課題解決への能力を身につける

聴覚・言語コース

Hearing and Language Sciences

募集人員	若干名
取得学位	修士(社会健康医学) [Master of Public Health (MPH)]
単位数	42単位 (MPH必修17+コース必修21+課題研究4)
取得できる資格	静岡県専門聴覚言語師※

先天性重度難聴であっても、適切な治療、介入で音声言語獲得が容易な時代となっています。

音声言語獲得の有無はその後の学習、社会生活の質に大きな影響を及ぼします。

また、加齢性難聴の放置は高齢社会においては社会的孤立、認知症発症の最大の危険因子となります。

本コースでは、聴覚、語音認知、言語発達、発話という高次脳機能に関する知識を深め、

乳幼児難聴のスムーズな音声言語獲得をめざす介入法や加齢性難聴のケアのあり方などを学びます。

求める人物像

日常的に聴覚言語に携わる医師、言語聴覚士、研究者の他、教育、保健福祉関係者で難聴児、言語発達遅滞児等に対応する関係者であって、聴覚障害やその解決への課題意識を持ち、きこえの仕組みの理解から、各世代に対する聴覚補償のあり方、さらに言語発達、認知の仕組みなどの体系的な基礎知識と実践能力の習得に意欲のある者を求めます。

キャリアパス

わが国にはこのような医・工連携の聴覚・言語の履修コースはないため、卒後、研究者としてのこの分野の第一人者となり、多方面での活躍が期待されます。医療関係者にあっては、その学びを日々の臨床に活かして、診療内容の質の向上、さらには深く掘り下げた新知見の発信などの社会還元が期待できます。また、教職、保健福祉関係者においては、その分野での指導的立場となることが期待され、ひいては聴覚障害児の障害軽減に繋がることをめざします。

静岡県専門聴覚言語師※とは

先天性高度難聴児に対する早期診断、音声言語獲得に向けた適切な介入や、老人性難聴者に対して適切な聴覚補償を実践します。

資格種別 | 民間資格(静岡社会健康医学大学院大学が独自に認定)

資格取得要件 | 社会健康医学研究科修士課程聴覚・言語コースを修了



聴覚・言語コースの主な科目

聴覚解剖・生理学概論	聴器(外耳、中耳、内耳)の構造と機能の関連を学び、空気振動が蝸牛内で電気信号に変換されるメカニズムの基礎を学びます。
聴覚心理学概論	聴覚を論ずるに当たって、音を捉える指標に物理量と感覚量があり、その関連から聴覚心理学(聴覚物理学)の基礎的知識を学びます。例えば、騒音下の聞き取り、多数話者の中での聞き取りなど工学的、機械的に抽出不可能な音素の認知をヒトは無意識に行っています。
認知科学概論	認知科学とは一般に脳科学とも言われ、ヒトの知的活動を情報処理の視点から、解明する極めて学際的領域です。聴覚・言語領域において、語音聴取から意味理解までの認知のメカニズムが研究対象となります。感覚、注意、学習、発達などの教科書的知識を学びます。
知覚情報処理演習	研究実施(実験刺激の作成、生体信号の分析など)に必要な、信号処理、プログラミングの最低限の技術を身につけます。研究室には刺激として音(PC制御された12個のスピーカー)、画像(視覚刺激)があり、採取信号に脳波、脳血流、眼球運動、頭部運動などがあります。これらを研究目的に応じて、コントロールする基本的技術を学びます。
聴覚障害学	聴覚障害には伝音難聴、感音難聴、後迷路性難聴などがあり、その他、音は聞こえるが言葉がわからないという中枢が関与する語音認知、音声処理障害などがあります。先天性の重度感音難聴に対する人工内耳は音声言語獲得に重要であり、老人性難聴に対する補聴器は認知症、孤立の対策として重要であることを理解して障害への対応を学びます。
言語・認知・発達学	音を聞くことと言葉を解することは別次元の事象であり、音の繋がりからことばの認知にいたるまでの過程には複雑な音声処理がなされ、最終的には大脳の学習、記憶、感覚統合を参照して語音認知が可能となることを理解し、併せてこの脳神経回路形成には乳児期の一定の感受期の聴覚刺激が必須であることを学びます。
聴覚補償技術	難聴とは音の大きさだけの問題ではなく、音がひずむ、響くなど質的な問題を含むので、単に補聴器で音を大きくするだけでは不十分なことがあります。加齢性難聴では蝸牛のコルチ器(電気変換)の障害を伴うので補聴器の調整に限界があります。近年、重度の先天性感音難聴に対して人工内耳で音声言語獲得が容易な時代となっていることを学びます。
聴覚検査法	聴覚検査の目的は音声の聞き取りの障害の程度を評価することにあります。一般的には複数の周波数の聞き取りの最小の音圧をプロットすることによって聴覚検査とされています(気導聴力)。さらに手術で治る難聴であるかを知るために、骨導聴力検査が合わせて行われます。その他、耳小骨連鎖、内耳エコー、脳幹反応検査などの意義を学びます。
知覚・生体計測演習	聴覚や神経の特性を評価するための様々な感覚・生体計測を体験し、自ら実験を行う能力を養います。標準純音聴力以外に語音聴力検査、耳小骨筋反射、耳音響反射検査(OAE)、聴性脳幹反応検査(ABR、ASSR)などを学びます。さらに発展的な検査としてEEG、NIRS、瞳孔・眼球運動なども体験し、聴覚心理物理学への導入とします。
聴覚療育・リハビリテーション論	先天性の重度難聴児が1才前後で人工内耳手術を受けた後の順調な音声言語獲得を支援するために様々な介入が必要となります。適切な聴覚活用と音声言語発達の評価に合わせた(リ)ハビリテーションが必要です。幼児の言語発達の評価、介入法の基礎的知識を学びます。
音声言語科学	音声(発話)に特に着目し、その基本的知識や脳科学的メカニズム(発話・音声連関やその発達も含む)を教授します。特に聴覚(感覚)と発声(運動)の連携について学びます。
課題研究	これまでの業務上の経験、講義・演習等で得た気付き、各人の関心に基づいて、解決すべき難聴・言語発達・認知症等に関する課題を設定し、研究計画書を作成します。そして、研究計画書を踏まえたデータの収集、調査と分析を進め、その結果について、課題研究報告書の作成を目指します。

※科目は一部変更になる場合があります。